

SEMINAR

JNTO発

外客攻略のヒント

山本祐輔 JNTOデリー事務所長

vol.125

再開し始めたインド市場

インドでは新型コロナウイルスの感染状況が改善し、国内・海外への旅行が再開し始めている。アフターコロナに踏み出すインド市場の最新トレンドを紹介する。

インドでは22年1月から2月にかけて、新型コロナウイルスの変異種オミクロン株の感染が急拡大した。このインドにおけるコロナ第3波では、1日当たりの新規感染者数が1月22日に約35万人とピークに達するなど、デルタ株が大流行した第2波のピーク（21年5月20日、約41万人）に迫る状況となった。しかしその後、新規感染者数は急激に減少に向かい、4月4日にはインド全土で1日当たり800人を下回った。7月1日時点では、約1万7092人とリバウンドしているものの、感染状況は劇的に改善したといえよう。

現在では、デリー、ムンバイなど主要都市でコロナ関係の規制がほぼ撤廃された。コロナ禍が始まって以来、政府が義務化していた公共の場でのマスク着用も、4月上旬にはデリーなどで撤廃され、感染状況の改善を受けた経済活動が活発化している（なお、感染者数が再度増加し始めた4月中旬以降、デリーおよび周辺都市ではマスク着用が再度義務化された）。

経済活動の活発化に伴い、5月の国内線搭乗者数も約1210万人まで回復しており、インドで新型コロナウイルスが拡大する直前の20年2月の1237万人とほぼ並ぶ水準に達している。これまでは、感染状況が悪化するたびに国内線乗客数も大幅に減少するなど影響を受けてきたが、感染の波を経験するたびにその減少幅は小さくなっている。また、第1波の際に約24%まで上昇したインド国内の失業率も、第2波では約12%、第3波では約8%と次第に縮小しており、コロナ禍と経済活動の共生が進んでいる

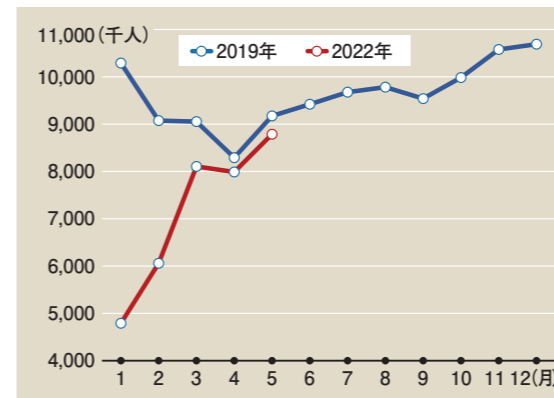
といえる。

インドを発着する国際定期旅客便については、第1波に見舞われた20年3月下旬に政府が離発着停止措置を開始したため臨時便やチャーター便のみが運航されてきたが、感染状況の改善により同措置は3月26日をもって終了し、翌27日に定期便の運航が約2年ぶりに再開している。インド空港局（Airports Authority of India）の公表データを見ると、デリーのインディラ・ガンディー国際空港の利用者数は国内・国際線合計で5月に約524万人を数え、コロナ前の19年5月の528万人にほぼ並んだ。ムンバイのチャトラパティ・シヴァージー国際空港の利用者数も約90%まで回復するなど、人的往来がコロナ前に戻りつつあることがわかる。

訪日以外の海外旅行は再開

インドでは第3波が拡大する前に臨時便を利用した海外旅行がすでに再開しており、21年9月頃から隔離なしでインド人観光客の受け入れを行っていたアラブ首長国連邦（UAE）、カタール、モルディブ、ドイツ、フランス、オランダ、スイス、スペインなどに加え、7月時点で英国、米国、シンガポール、マレーシア、タイ、豪州、韓国なども隔離なしで受け入れられている。日本は6月以降、水際措置を緩和し、「青」に区分された98カ国からの観光客については条件付きで日本への入国が認められるようになったが、インドは「黄」に区分されており、引き続き観光目的での入国が認められていない状況である。

●デリー・ムンバイの空港利用者数



インド民間航空局（Directorate General of Civil Aviation）が公表しているインドからの旅客出国先の最新データ（21年7～12月）を見ると、UAE、カタールなど中東諸国、モルディブ、スリランカといった近隣の国や北米・欧州の国々が上位を占めている。今年6月に当事務所が行った現地旅行会社へのヒアリングでは、中東、欧州、モルディブなどに加え、観光客の受け入れを再開したタイ、シンガポール、マレーシアの人気も高まっているとのことだった。一方、政治・経済の混乱が報じられているスリランカについては旅行商品の販売を控えているとの声があった。

トレンドに変化

再開しつつあるインドからの海外旅行において、どのようなトレンドの変化が起きているのだろうか。アメリカン・エクスプレスが実施した調査「22年グローバル・トラベル・トレンド・レポート」におけるインド人の22年の旅行意識について、現地メディアは次のように報じている。

- ・家族と旅行したい（94%）
- ・海外旅行に対し昨年より多くのお金を消費する（94%）
- ・さまざまな影響により日程変更やキャンセルがあるとしても旅行を予約する（92%）
- ・ドリームデスティネーション（そこに行くのが夢だと思っていた旅行先）に行きたい（69%）
- ・複数の景色（ビーチ、都市、山、砂漠等）を見られる観光地に行きたい（94%）
- ・環境に配慮しているブランドを通じて旅行を手配したい（93%）

●インドからの旅客出国先(コロナ前後の比較)

順位	19年7～12月		21年7～12月	
	出国先	旅客数	出国先	旅客数
1	UAE	4,901,303	UAE	2,697,693
2	シンガポール	1,180,662	カタール	784,879
3	タイ	1,170,723	米国	281,633
4	カタール	891,598	英国	266,417
5	英国	858,946	モルディブ	237,484
6	サウジアラビア	853,178	オマーン	185,756
7	マレーシア	773,721	クウェート	177,533
8	オマーン	731,768	ドイツ	130,530
9	スリランカ	676,627	スリランカ	123,445
10	香港	531,300	カナダ	113,270

資料：インド民間航空局 ※インド国籍者以外。観光目的以外の乗客含む

・自然に接する「グリーンケーション」に行きたい（94%）

これらの調査結果は、インド人が海外旅行に非常に積極的であることを示すとともに、これまで選択肢に入っていなかった国への訪問、自然志向、環境への配慮など、コロナ禍による嗜好の変化が見取れる点が興味深い。

コロナ前の訪日市場は、学校休暇シーズン（3～5月）とディワリ期（ヒンズー教の新年祭、10～11月）がトップシーズンであり、グループツアーでゴールデンルート（東京、富士山、京都、大阪、広島）を訪問するケースが多かった。また、12年から19年にかけて、インドからの訪日市場は年率で平均15%程度という急成長を遂げてきたものの、観光客数はタイの約20分の1、フランスの約10分の1と低い水準だった。アメリカン・エクスプレスの意識調査の結果を踏まえると、都市だけでなく、四季折々の自然の景観、ビーチ、寺社や城がある街並みなど、さまざまな景観を家族で安心・安全に楽しめる日本は、コロナ後の理想的な旅行先だといえるだろう。

先に述べたとおり、インドからの海外旅行は着々と再開しており、現地旅行会社からも当事務所に「多数の顧客が訪日観光の再開を待ち望んでいる」との期待の声が数多く届いている。また、22年は日印国交樹立70周年の記念すべき年でもあり、インドにおいて日本への注目度が高まることが期待される。

今後も現地の最新情報を収集しながら、日本の旅行業関係者と連携したウェブサイトやSNSでの情報発信、商談会の開催などを通じて、インドからの訪日旅行再開に備えたい。

（次回は9月19日号に掲載します）